2019年 鮎漁のまとめ

大井川（750kg放流）

今年はシーズン初期の釣果を見込み、４月～６月初旬にシーズン初期に釣れやすい人工種苗（鶴田湖Ｆ10）を中心に放流を重ねましたが、６月前半は釣果が出ず、６月後半以降は河川の増水により釣りができない状況となりました。また昨冬～今春の少雨により大井川河口の水量が減ってしまったことから天然遡上も少なく２年続きの不漁年となりました。

伊久美川（760kg放流）

大井川への遡上減少により河川産（河口採捕）の放流量が例年の半分ほどでした。解禁前のアユの流出を回避するため、解禁前後に成魚放流を実施しましたが、釣り人から「今年は伊久美川の鮎が少ない。」との話も多く、改善すべき点が見られました。１０月には中平地区上流などで２７ｃｍ以上の鮎釣果がでました。

アユ産卵場整備、実施できず

減少するアユ資源の回復に少しでも寄与し、有効な産卵を促せるよう、手作業による産卵場整備を大井川下流部で計画しました。しかし、大井川の水量・濁りが落ち着き始めた 11 月９日時点の水温が 13℃とかなり低く、作業が河床の着卵に悪影響を与える可能性が高かったため本年の作業は見送りました。

アユの産卵は河川水温が 20℃に低下した頃が目安となり、産卵が活発になるのは 15℃以下に低下した頃からと言われています。

増殖事業の見直しについて

組合員が大井川で最も楽しみにしている「盛夏の友釣り」を取り戻せるよう、種苗の調査研究や、放流方法の見直し、アユ運搬用具の充実や水質検査など費用対効果を考えながら様々なことを検討しています。

＜経過報告＞濁水について中部電力と協議

本年３月に中部電力㈱へ要請した『大井川水系のダムによる濁水長期化の改善』について 11 月 13 日、協議を行いました。



↑８月を迎えても濁りが残る大井川（鍋島）

長年の懸案事項である本件については中部電力から、**①水力発電所とダム、②下流利水の現状、③川口発電所の運用状況、④濁水の発生メカニズム、⑤水源地の崩落地等の状況、⑥流入土砂の特性、⑦大井川水系の濁水対応、⑧他河川での取り組み**などの話があり、対応が難しい現況であるとの説明を受けました。

当組合からは、「近年の川口発電所からの放流の濁水は看過できない状況で組合の死活問題である。」「畑薙第一ダム、井川ダムなどの大型貯水型ダムの湛水地は渇水期の濁水の発生源になっていて、大井川上流から繋がる長い導水管は冷濁水の根源である。」などを訴え、**①川口発電所の運用を環境重視の方向で見直す、②湛水地対策を行う**など具体的な対応を求めました。

なお本件は、今後も継続協議を行います。（諸田）